

移転後の旧県庁舎

広がる運動の輪

いま議論の芽をあちこちにばらまいている段階なんだぞうだ。議論の対象は、福岡県庁移転後の跡地利用である。欲得抜き、打算抜き、仲間うちで一年近くうろろしているうちに、世間でわずか知られるようになった。『県庁舎の保存再生を進める会』という名称のもと、目下、会員三十数人。この種の運動が福岡で広がるのは珍しいことである。この人、玉井輝大さん(こは、会の代表であり、福岡市役所建築局宮脇課に籍を置く公務員でもある)。

『大学の建築科(京都大学)で都市問題に興味を持ち、生活者から見た町づくりを考えられる職場に入りた。現実にはなかなかそんな仕事はないし、市役所が最も近い位置にあるんじゃないかと、思いつくことに就職しました。同期生と都市問題を考える会を作り、わいわいやつたわけだ』

県庁舎の建築美

『で、去年の七月、県庁が東公園に移るといふニュースが発表されたさい、都心があれば空と

市民活動のメツカに

県庁舎再生運動を進める
玉井輝大さん



天神の「顔」を壊すな

いうことは、市民として十分考えてみる価値があると思ひまして。『県庁ねえ、建物としては遅れてるっていうか。たよは、おたくのビル(西日本新聞社)遅くから見ると、ものすごくいいんですよ。色がね、好きですよ、ほか

す。こんなものは、なかなかありませぬ。『ほくは都心のあり方を見れば、その町の文化程度がそのまま表れていると思

やたら人が多いばかりで、いつも追いつけられない気分だし、ただ知らない者同士がスレ違ふだけという疎外感も強い。天神最後の場所

それは市民会議の冒頭、フィルムで写し出された県庁舎の建築美だったという。カメラをかついで十数回、県庁のあちこちをパチリ

くから見たシルエットがいいです。ところが県庁は、細部をじっくり見れば見るほど素晴らしいだひとつの社交場である喫茶店は

くつか、玉井さんは出した。案の中核となっているのは、天神の顔のひとつとなっている現庁舎を取り壊さず、九十教室におよぶ大小の部屋を市民活動の場として開放しようということである。

『喫茶店で定例会を持っていますが、そりゃもう、じつに多くの意見が出ます。跡地をすべて緑の木で埋めようとか、墓舎所にしたらとか、保育所にするとか、最初は思いつきの意見でいいが、本当に欲しいものなら、思いつきを一歩進める努力をせねばならないと思ひます。市民運動でいけば、懸念されるのは、思いつきのレベルにとどまってしまうことです』。

文化サロン
社交ハウス

国際ハウス(県警本部長官舎)
児童館(県知事官舎)
国際ハウス(県警本部長官舎)
児童館(県知事官舎)

陳外するような近代ビルを建てちゃいかんとほくは思ひうわけです。大きな近代ビルは、ドアにカギかけると、巨大なコンクリートの壁に過ぎなくなるんですよ』

いま会員の平均年齢は二十五、六歳。もつと世代を広げたいし会員も増やしたい。現在は県庁跡地利用という限られたテーマだが、将来は『わが福岡の町をどうするか』まで話し合える市民サークルにまで発展させたい、という。

西0# 781107 (7)